

備前焼の歴史

備前焼への移行期

古墳時代に渡来した須恵器は、古代律令体制の発展のもとに隆盛を極めていましたが、その崩壊とともに衰退し、平安末期には終末をつげました。

邑久郡を中心とした備前の国の須恵器は「貞観式」「延喜式」によると、全国の須恵器生産地の中でも有数の生産量を誇っていましたが、各地の須恵の例にもれず平安末期には須恵からの転進をよぎなくされ、須恵器は山一つへだてた伊部の北西にある医王山の山裾で、新しい焼き物「備前焼」へと移行していきました。新しい窯業地を熊山と定めたのは、熊山には当時霊山寺という大きな寺があり、寺の瓦や祭祀用具を焼くということもあったと思われます。そして何よりも熊山には燃料が豊富にあり、使える山土もあったこともこの地を選んだ理由だと思われます。

品種は、壺・甕・坏・皿・鉢・鉢・瓦の生産が主で、焼けは暗灰色の還元焼成となっているのが特徴です。須恵器の品種・技法を残しながら、日用雑器生産の傾向を強めていきます。

鎌倉時代

この期の特徴で、焼けの面では還元焼成が主ですが、酸化焼成のものが次第に増えてきて、焼成温度も高くなり、胡麻が現れ始めます。「瓦」の生産がなくなり、「鉢」の進歩したものとして描鉢が出現します。また、この時期の特色として、碗・皿を主とする窯と、甕・壺・鉢等を主体に焼く窯とに分れて生産されたようです。碗・皿を生産する窯は、焼成温度も低く実用性に乏しかったためか短期間で消滅していきます。

一方、壺・甕・鉢等を生産した窯は更に発展し、壺・甕・描鉢に品種を統一して、酸化焼成の大規模な窯となり、技法的にも須恵器の手法を脱して、肉厚で堅固な実用性の高い日用雑器の生産を本格的に始めました。



直線文壺 鎌倉時代
(備前市美術館蔵)

日用雑器としての備前焼は需要が次第に増大し、窯は、伊部の周辺の山麓に分散して、より良質の原土と燃料を求めて谷川に沿った山の奥に入っていました。

これまで発掘調査された代表的な鎌倉時代の備前焼窯跡として、グイビヶ谷窯跡と合ヶ淵窯跡があります。

鎌倉時代後半に入ると山陽道が、三石（伊部）福岡の南路線に変わり、福岡で盛大な市が開かれるようになりました。また、長船では鍛刀が盛んとなりました。山陽道を中心としての伊部周辺の発展は目ざましいものがあり、交通や経済の発展は広域に文化を伝搬し、生活を向上させ、日用雑器の需要が増大しました。

グイビヶ谷で第一歩を踏み出した備前焼は、壺・甕・描鉢の生産で次第に天下に名を拡げていきました。その備前焼の盛況は当時の「遍上人絵伝『福岡の市の図』（1299年）」に、山陽道沿いに小屋掛けをし、商品の入れ物として使用した備前焼の壺や、売り物の壺を並べて商いをしている状況が描かれています。

さて、この期の窯は半地上式の登り窯が熊山の谷

に沿って山中に集まって築かれているのが特徴です。窯は現時点で50カ所弱発見されていますが、そのほとんどは、海拔1000mを越す山中であり、中には海拔3000mを越える窯もあります。これは需要の増大から燃料・原土の消費が増大し、原土を求めて熊山山中に入って窯を築き、ロクロを回し、周囲の木を切って窯に用いたためであると思われる。生活も山中の窯の周辺で営まれるため、便宜、安全、協力の意味から、2、3窯が集まって築かれたと推察できます。

また、こうした山中に窯を築いたことは陶工達の生活の確立をも示し、熊山寺院の保護をはなれ給田を捨てて、備前焼の生産一筋に踏み切ることのできる状態になったと考えてよいと思われます。

室町時代初期・中期

この期は、室町幕府の成立から衰退へ向かう時期にあたり、新しく興った守護大名は自己勢力の拡充と領土保全のため産業の育成に努め、市や座が盛んとなり、都市が起り、交通は発達し、商工業が発展しました。

また、文化面でも、禅宗や公家文化の強い影響を受け、能、狂言、連歌、草子等の新しい芸能、書院造り等の建築様式を生み、学問、水墨画、華道、茶道、工芸等の発展は目ざましいものでありました。中でも茶華道の流行は、中国陶磁の招来を盛んにし、将軍や大名による名器蒐集をすすめていきました。こうした茶道の展開は、新興商人階層の台頭とあいまって陶磁器の需要を増大させ、瀬戸をはじめ国内の各窯に大きな刺激を与え、その発展を促進させました。備前焼においても、こうした時代の影響は大きく、福岡の市の発展や、山陽道と吉井川を中心とした交

通、更に牛窓や片上港の海運により交易圏を拡げ、備前焼は九州から関東までその商圏を拡大しました。

備前焼の名品には「海揚げり」と呼ばれるものがありますが、これはその名のとおり、海から引き揚げられたものです。桂又三郎は「応永窯と海揚げり古備前」の中で、海揚げりの最初は正徳8(1919)年で、与島の瀬戸物屋に並べられたとあります。与島出身の潜水夫が直島沖の海底で引き揚げたものということです。昭和52(1977)年には、小豆島内海町沖の水ノ子岩海底から大量の備前焼が水中から引き揚げられました。時期は室町初期と推定され、播鉢が多かったということです。

水ノ子岩の遭難位置、バラストを底荷とした大型高性能船は近距離離用ではない、備前東部の荘園は吉野・熊野と深い関係がある、和歌山県の海岸部からは古備前がよく出土するなどの理由から、この船の行き先は紀州であったと考えられています。

このように、備前焼は室町初頭から急速に生産の規模を拡大し、壺、甕、播鉢は日用陶器として発展、その地盤を確立していったのです。

室町期に入ると需要の拡大から窯の規模も大きくなり、製品の販売に便利な平地近くに窯を築くようになりました。製品は播鉢を中心に壺、甕が主で、酸化焼成のよく焼きしめたものです。



播鉢(備前市埋蔵文化財管理センター蔵)



大甕(備前市埋蔵文化財管理センター蔵)

鎌倉期に出現した播鉢はその堅固さと使い易さか

ら次第に需要を高め、室町初頭にはすでに備前播鉢の名を近隣諸国に響かせました。室町中期に入ると膨大な播鉢の陶片が窯跡から出土していることから大量に生産されていたと考えられ、全国的にその名を知らしめていたと推察できます。また、この時期、播鉢の口縁の作りが帯状に変化します。これは、量産のための重ね焼きと播鉢内面の保護のために考案されたものと考えられます。このようにして、播鉢の本格的な量産が始められ、後世の「備前播鉢投げ」でも割れぬ、備前名物数々あれど伊部播鉢日本一」ともてはやされる基礎を確立したのです。

室町時代末期・安土桃山時代

この期は、室町の守護大名は没落し、激しい下克上の中から新しい実力を持った戦国大名が登場しました。領国では富国強兵策をすすめる、郷村制は確立され、天然資源の開発は盛んとなり、手工業は発達して、市も楽市楽座となってきました。こうして商工業は発達し、それに伴う都市の繁栄は、より豊かな経済的実力をつけた町人階層を生み、町人が新しい政治体制や文化の支持者となっていました。

こうした文化・経済の発達により、町人をはじめとする庶民の生活は次第に向上し、当時木製品が主であった日用食器類にかわり、高級品の陶磁器が使われるようになり需要を高めました。

また折からの日明関係の悪化は、明国の陶磁器の輸入を困難とし、その肩代わりを国焼に求めるようになり、瀬戸を始めとし、備前、丹波、信楽、常滑、越前などの窯業は、その生産量でも品質においても素晴らしい向上をみせました。

また、村田珠光により起こされたわび茶は、千利休により革新的で斬新な茶の湯へと発展をとげ、新

しい町人階層の人気を博しました。他方、権力者は支配の方法の一つとして、また権力の誇示のために茶の湯を利用し、茶の湯は大流行しました。

こうしたことから、名もない信楽、備前等の日用雑器が一躍天下の名器として取りあげられ、日用雑器に茶器という新分野を加えて、技術的にも大発展をとげ、更に楽・志野・黄瀬戸・瀬戸黒等の名陶が生まれるに至ったのです。

備前焼においてもこうした時代の動きの中で、需要は増大し、その需要を満たすため、成型技術の改良や、田土の使用、大窯の築造等の技術が開発されました。共同窯もこの時代から考えられた生産方式で、座の発展もあって本格的に近世へ踏み出していました。製品も播鉢、壺、甕に加えて徳利、皿、鉢、大甕等の生産が始まり、更に水指、建水、花入、茶碗などの茶器生産も本格化し、作品の量とともに質的向上に目ざましいものがありました。

この備前焼を貴重な芸術として世に出したのは、前述の如くわび茶の流行であり、中でも武野紹鷗、千利休等の茶道指導者であり、豊臣秀吉でした。珠光により天下の名器として取りあげられた備前焼は、わび茶の最高の物として茶人たちに愛され、各種の茶会で取りあげられ、全国にその名を高めていきました。

秀吉は、天下一の茶会とされる北野大茶湯(天正15(1587)年10月14日)において、第一席に紹鷗は「備前水こぼし」を飾り、御棚後に備前筒花入を、そして「博多いもかしら」(備前焼)を今井宗久が、というように天下の名器に互して重用し、死しては備前焼二石甕を棺に使用するといふほど備前焼を愛したのです。

また、秀吉は、備前焼保護のため、竹木免許の制

札を下し御留山とすると、陣取禁止の制札、また窯を一カ所にまとめ御留焼とする等の保護を加えて備前焼の発展に力をそそぎました。

このようにして、備前焼は製作技術も向上し、生産量も膨大なものとなり、販路も水陸交通網の発展により九州、四国から山陰、北陸、関東と拡がり、量的にも多量のものが販売されるようになりました。

この期の窯は、榎原山北山麓の南大窯、不老山南山麓の北大窯、医王山東山麓の西大窯の三窯であり、山裾のなだらかな傾斜面と平地との接点に窯を築いています。窯は街道に最短距離であり、土、薪、製品の輸送の便が第一に考えられています。また、窯跡の陶片の大部分に窯印がついていることは、この期から共同窯の制度が取り入れられたことを示しています。初期の窯印は、共同窯になったことにより自他の製品を区別する必要から生じた目印であり、符号でした。目印ですから、製品の胴に大きく目立つようにヘラで、数字、線、○や△、□の形が無難作に彫り込まれているものもあります。これが桃山期に入ると、個人の印もひとまず決定し、肩や底に作品との調和を考えて印されるようになり、印も整ってきます。

江戸時代初期

この期は文禄から寛永という、桃山から徳川幕府の創成期にかけての時期で、新しい時代成立の活気あふれた時代です。

秀吉の全国統一は徳川家康に引き継がれ、封建制の再編成がなされました。交通は発達し、貨幣制度も定着して産業は全国各地で発展していきました。その結果、江戸、大阪をはじめとする城下町を中心に

商業の発達は目ざましく、社会の実権は次第に町人が握るようになりました。また西欧文化の伝来は、医学・天文・地学などの科学の進歩をもたらせ、印刷技術の伝来は学問の研究とその普及に貢献しました。

このように経済、文化面にも大きな飛躍の期でした。陶芸の面でも、商業、産業の発展、藩主の保護奨励、茶華道の流行により陶芸の発展はめざましいものがあり、また日本陶芸にとり最大の転機でもありました。

その一つに、本格的な釉薬陶生産があり、また一つは磁器生産の開始があります。秀吉の起こした「文禄慶長の役」は、別称「茶碗戦争」と呼ばれ、この戦いにおいての戦利品は領土も名宝もありませんでした。茶碗だけは（茶碗を作る陶工を連れ帰ったことから）戦果としてもたらされたのでこう呼ばれました。

こうして連れ帰った陶工達は、彼らの進んだ技術を持って、萩・唐津・上野・薩摩等各地に窯を起し、大名達は彼等を保護しその発展につとめました。そればかりでなく、在来丹波・常滑をはじめとする窯に釉薬技術を伝え、在来窯は備前焼を残してほとんど施釉陶へと転換したのです。

また一つは、唐津系の窯で生産を始めた陶工達の中で、李参平を長とする一集団が、九州有田で白磁石を発見し磁器の生産（伊万里焼）を始めたことです。

後一つは、古田織部の出現です。彼は珠光↓紹鷗↓利休の後をうけて日本の茶道の師と仰がれた武将でした。利休のお茶は「茶禅一味の茶」であり「草庵茶」「わび茶」と呼ばれ、求道的なもので、中世的名残が感じられるのですが、織部の茶はこうした

禅的世界に決別し、自由にして豁達、何事にもとらわれない現世的生命力があふれています。利休の静に對して動、無作意に對し徹底した作意、没個性に對し個性のであり桃山の雰囲気を実によく表しています。

彼の意匠による茶道具も「織部好み」といわれ、個性的で作意の徹底したもので、全きもの、整然たるものを退け、動的であり破調逸格なもの「ひづみもの」「へうげもの」を好みました。この織部の指導により、自由で変化ある造形と明るく生命力に富んだ色彩を持つ織部焼が生まれ、またこれは各地の窯、特に伊賀、備前に大きい影響を与えました。彼こそ桃山文化の担い手であり、彼によって日本の焼物が近代的美意識を知り、芸術への第一歩を踏み出したのです。こうした桃山の陶芸は、織部から本阿弥光悦にうけつがれて結実し、更に尾形光琳や乾山を生んだのです。

備前焼においても、日用陶器販路拡大と、茶道の隆盛による需要の増大で、ロクロ技術は飛躍的な進歩を遂げ、茶器の生産が本格化して備前焼史上での最盛期を迎えました。この盛況を支えたものに、前述の需要や茶道、そして製法の進歩がありますが、これは秀吉や池田藩による土・燃料・御細工人制度等の保護政策という強力な支援があったからです。

また、この期の特色として、備前焼が伝統を守り無施釉陶として生き抜くべく決定したこと、古田織部の影響で「織部手」と云われる変化に富んだ男性的豪壮さをもった作風を身につけ、つづいて小堀遠州流の「遠州手」「上手」とか「伊部手」と呼ばれる女性的で端正な作風を習得したこと、それに伴い、ふるい土、おろし土の技法、更にロクロの水びき、水簸土の技法を生み出したこと、また「細工物」と

いわれる置物、香炉等の制作が始まったこと等が、特筆しなければならない点です。

中でも、「文禄慶長の役」以後渡来した朝鮮陶工の指導により各地に施釉陶が起り、信楽・丹波・常滑をはじめとする日本古来の窯業地が施釉陶へ転進を行った時、ただ備前焼のみ無施釉陶として製作を続け大発展をとげたことは実に重大な進路の決定であり、不可思議なこともあります。特に当時の備前地方の支配者である「宇喜多秀家」は朝鮮の役における総指揮官であり、秀吉の寵臣として茶道にも深い理解を持つていたことから、当然朝鮮陶工を連れ帰り、その技術を備前焼の発展に活用しても不思議ではないと考えられるにもかかわらず、施釉陶の試みも発見できず、朝鮮式ロクロも入っていないし、文献資料にも見当たりません。こうした情勢下における備前焼の、無施釉陶不変の進路決定をした要因は、推測の域を出ませんが、

第一に、備前焼が非常に繁栄し、需要が大きくなり、生産に追われる状況の状態であり、特別に製品の変化を求めたり、技術開発を必要としなかったため、秀家が朝鮮陶工を連れ帰らなかった。

第二に、備前焼自体の問題として、原土が耐火度が低く収縮が大きいので施釉陶土として適当でないこと、製品が挿鉢・甕・壺を中心としており、釉薬を利用することによる特別な利点がなかった。

等のことの原因ではないかと推察できます。

もし施釉陶への転進をはかっておれば、原土の不適性、埋蔵量、燃焼不足等から磁器生産の始まりとともに姿を消したであろうことは想像に難くありません。

さて、茶器が本格的に生産され、秀吉、織部をはじめとする茶人に愛されて、唐津・織部をはじめとする諸窯地の抬頭にもかかわらず、茶会においては、

備前焼は盛んに取りあげられていました。中でも古田織部の好みによる織部手の作風は、備前焼の力強く温かで男性的な土味と調和し歓迎されました。

織部の没後に登場してきた小堀遠州を中心とする優美な「大名茶」の影響と、各地の施釉陶の生産に影響されて、伊部手が生まれました。伊部手とは粒子の細かい土を使い、薄作に作って、塗土を施し、一見施釉陶の如き感じのする女性的で繊細な作品で、荒土物から、元和期に、ふるい土、おろし土の作品へ、更に寛文頃から水簸土に、伊部手へと移行していくのです。

寛永9(1632)年、備前藩主となった池田光政は、学問や産業の振興に力を注ぎ、耕田、干拓、藩校、宗教をはじめとし各種の施策を行いました。備前焼もこれを藩窯とし、土・燃料を払い下げ、窯奉行を置き、名工を選んで「御細工人」を定めて扶持を与える等の奨励策を講じました。

燃料は、松材ですが、長さ50m・幅5m前後の窯を40日前後燃焼するには膨大な量の薪が必要であり、雑木類も使用せられたと考えられます。薪は秀吉のお留山文書や竹木免許の制札以降、代々の為政者により払い下げられる特典が与えられていました。

原土は、「ヒヨセ」と呼ばれる田の底土で、従来の「荒土」と「ふるい」でおろした「ふるい土」「おろし土」で、粒子は大体均一で、肌にし荒さと粘性の少なさを感じさせます。伊部手の作品に使用された土は「ふるい土」「おろし土」と「水簸土」で、粒子の細かい均一な土で気泡はほとんど含まれていません。塗土も次第に一般化し、この期の終りには邑久郡磯上村の「黒土」を使用し始めて、より肌の堅い金属質の感じを与える作品へと移行します。なお織部手の流行した慶長末年からのヒヨセは、通常

「慶長の土」と呼びます。焼けの変化の出やすい明るい土味の土です。

次に、この期における陶印は、肩か底に一つつけられており、形も小さくと整っています。慶長初年頃から「押印」がみられだし、元和に入ると押印がほとんどを占めてきます。なお茶器の織部手の作品には見込みに記された作品が多いようです。

作品の種類では、備前焼の黄金期といわれる如く、作品の量も種類も器形の変化も多種多様で膨大なものですが、前期と比し特記すべき点は、織部手・伊部手の作品が作られていることと「細工物」と呼ばれる彫塑風の、香炉・香合・置物等が始まったことでしょう。細工物は、慶長末年から香合や香炉が作られ始め、鉢や灯籠などにへうで透かし模様が試みられてきます。こうした細工物と呼ばれる作品が発展して江戸中期の置物製作全盛期を迎えるのですが、初期の細工物は技術的には未熟で幼稚ですが、ハニワにも似た稚拙の味があり、生命力にあふれた温かい豊かな作品が多いようです。

江戸時代中期

この期になると、封建社会は確立され、世はいわゆる太平の時期を迎えます。町人階級の経済的実力が確立し、町民の生活の中から生れた町民の文化が育ちました。これが元禄文化です。

この元禄文化は、町人の経済力に支えられ、豊かで生き生きとした明るさがみなぎり、武家社会との調和もとれ、享乐的で明朗、だから絵画・文学にも反映して以前と異なった町民の文化が作り出され、その所産として、俳諧、浮世草紙、文楽、版画が盛んとなりました。

陶芸の面では、肥前を中心として磁器生産が高ま

り、産業の振興、茶道の流行によって起こされた各地の御庭窯や、在来の伝統的な窯々も、磁器の圧迫から次第に各窯独自の特色を発揮しなければ生きられなくなりました。しかしこうして各窯独自の地方的色彩が強まれば強まるほど、制約のきびしい封建社会の要請に応じた形式的な技法が尊ばれて、人間的な制作意識から生まれたおらかな内容の豊かさを持った作品がなくなつて味のない平凡なものとなりました。

備前焼も、磁器や各地の施釉陶の圧迫をうけ、従来の壺・甕・搦鉢や皿・鉢をはじめとする日用食器類、茶器・花器生産では立ち行かぬ事態に追い込まれました。そこで無施釉陶の利点を生かし、細工物といわれる置物に新生面を開き、これを主体に搦鉢・徳利の生産を継続しました。また「閑谷焼」「白備前」「彩色備前」や後楽園の「御庭焼」が始められましたが、無施釉陶としての生きる道を求めるには、苦しい試練時代でした。

藩でも、備前焼（伊部手が備前焼の主流を占めた）の振興をはかるため、茶道師範や御用絵師に作品の指導をさせるとともに、焼物の販売価格や方法の指示や、専任の奉行を置いての監督など種々の援助指導をおこないました。

こうした種々の努力と、今までつちかわれてきた備前の伝統が伊部焼の名声を持続させ、置物を中心とした伊部焼が備前藩の特産品として更に声価を高めたのです。山陽道を往来する旅人は勿論、西国の諸大名も参勤交代の途次、伊部に立ち寄り国の土産に伊部焼を求め、また北陸・山陰からの回船や、九州・四国の商船は伊部焼を満載して帰る状態で、備前の特産、伊部焼の名は一層広まりました。

こうした伊部焼について「和漢三才図会」は、伊部の搦鉢・甕・壺は焼物として最高のものであり、

徳利は朝鮮に次ぎ素晴らしいものと述べています。この他当時の紀行文や草紙類に伊部焼の記述が数多く見られることから全国的にその名は高まっていたことがわかります。

しかし、こうした特産物＝土産物としての名声も伊部窯の実態ではなく、陶工達の生活は苦しく元禄16（1703）年には藩に借金を願ひ出て急場をしのいだり、小窯を築き製品の回転を早めるとか、定量入の壺・徳利、更には釉薬物（白備前・閑谷）や土管製造にまで手を伸ばす有様でした。

作品の種類については多種多様で、花入から置物、神社の阿吽の獅子、屋根瓦、漁網の錘、鳥居、戸の滑車などまことに多岐にわたっています。

置物は、この期の花形であり、備前特産の土産物として人気を博しました。年銘物で最も古い作品は「貞享三（1686）年九月吉日、伊部南村御細工人、木村重房」銘の唐獅子一対があります。元来神社の唐獅子はほとんどが在銘物で、御細工人によって作られており、名品が多くあります。作品の種類もこうした唐獅子から香合・香炉という小物まで数多く作られており、名品は焼けもよく（胡麻がほとんど）黒光りのするもので、作者名を刻んでいます。

しかし、土型による量産方式となつて以後は、作品も形式的で写実的となり個性的な美しさを失いました。これは藩の積極的指導により、御用絵師の長谷川氏、狩野氏が伊部に派遣されて、下絵を描くという結果が作品の個性を殺すことになったとも考えられます。置物全般の質は一応向上し、均一化しましたが、焼けも赤茶色で浅く土も悪いものです。

閑谷窯

閑谷学校は最初茅葺、次いで黒瓦でしたが、最

後に備前焼の瓦で葺くことを計画し、貞享元（1684）年聖堂、同3年閑谷神社、講堂は元禄11（1698）年・同14（1701）年に改築と同時に備前焼の瓦に替えられました。この瓦は閑谷学校の南の谷、福神社の横に窯を築き、伊部の陶工のみならず、伊里、邑久郡、岡山に至るまで瓦師を動員して製作しています。この瓦を焼いたのは、貞享元年から同3年頃までと、元禄13（1700）年の2回にわたっていますが、破損修理のためにはその都度、伊部の窯元に注文し、追加焼成を依頼しています。そのため、瓦の刻銘に、「元禄十三年」のほか、「安永四年」（1775年）、「寛政五年」（1793年）等の刻銘瓦があります。

この閑谷備前焼瓦窯を利用して、瓦土で唐獅子等伊部焼同様の作品を焼成していましたが、新たに元禄初年より閑谷焼の窯を作り、青磁・栗田系・瀬戸系・白磁等失透性の土灰釉の作品を焼いています。大別すれば、半磁器風の硬い系統と京都系の軟い手の作品があり、伝世されているものは数える程しかありません。作品の種類は聖廟の祭器や香炉・置物等であり、藩でもこの閑谷焼発展のために、窯奉行を置き指導にあたりましたが、宝永7（1710）年頃に廃窯となりました。

白備前

閑谷窯廃窯と時を同じくして、正徳元（1711）年に白備前を始めましたが、享保元（1716）年には窯の縮小を申し出ていることから、それから間もなく廃窯となったようです。この白備前は、閑谷焼同様白土であり、閑谷焼より鉄分が少ないものに不透明の白釉をかけて焼成しています。焼成はサヤを使用していますが、ある程度焼成時に松灰がかかり、

部分的に釉薬が濁っているのが閑谷や白備前の特徴でしょう。作品は香炉・置物が主体で、主に藩の注文の品を焼成しており、備前焼や陶工の好みの作品を入れることは禁じられていたため、世上には数が少なく、あれば名品ばかりです。藩は、窯詰め、窯明けから製品の販売まで厳しい指示をしましたが、焼成時の破損が多く、正徳4(1714)年には3割の値上げをしています。

この白備前は、江戸末期と大正の初めにも試みられています。また、この白備前のために御細工人長十郎は、肥前にまで出かけて研究をしています。

彩色備前

軟陶で素焼の上に顔料で着色しており、一見博多人形の如き柔らかさと温かさに加え、上品さを持っています。博多物より幾分固めです。原図は藩の御用絵師が下書きを描き、御細工人が作り絵師が胡粉で地塗りした上に彩色したもので、精巧優美なものです。作品は、置物・香炉・香合などで当時から非常に歓迎されました。後樂園の御庭窯も試みられ、伊部から御細工人が度々出張しています。

江戸時代末期

文化・文政期を中心とした江戸末期は、形式化した封建社会機構の矛盾が表面化し、更に天災が相次いだことから、世相は混乱し、利那的、享樂的な文化が出現しました。

陶芸の面では、九州に始まった磁器の生産が、瀬戸・京都・九谷をはじめとし、日本各地に広まり、各藩の御庭窯、富豪達による趣味の焼物も盛んとなって、日本全国で一種の陶芸ブームの起こった時期です。磁器は食器として武士はもちろん、百姓町人にま

で生活必需品となり、御庭窯は藩や富豪の全面的支援のもとに茶器等趣味の焼物制作が盛んでした。

しかし、備前焼のような食器としての適性を欠く窯はこの盛況から取り残され、土産物としての置物を中心に、播鉢や角徳利、人形徳利の生産で細々と息を継ぐという状態であった。製品は売れず、粘土、薪の仕入にも差し支え、天保13(1842)年には遂に年一度の窯出しも無理という状態に立ち至り、藩への借金申しこみも度々だったようです。

この窮状を打開するため、窯の床埋めや縮小をして燃料の削減や焼成時間の短縮をはかり、製品の回転を早めました。更に、天保3(1832)年に連房式の登り窯を築窯します。場所は不老山の麓、北大窯跡の下で、今も残っています。

天保窯は長さ16m、幅4m、当初は5室に仕切られていたといいますが、現在、残っているものは7室になっています。窯たき日数も7日から8日、労力も経費も儉約できる便利な窯ということから融通窯とも呼ばれました。

この期の作品は大窯では人形徳利、灯明皿、小壺、置物であり、天保窯では「保命酒徳利」として広島県鞆の保命酒を入れた角徳利が数多く作られ、また古備前桃山期の模倣茶器も作られました。

明治時代

明治維新による欧化思想は、西欧文明万能の傾向を生み、旧物破壊の風潮が国内にみなぎりしました。当然の帰結として美術面でも、城・仏教をはじめとする古来の伝統美術は破棄の運命にありました。その反面、鉄筋や、レンガ造りの建築や、石彫、油絵が導入され、新しい技法や様式による美術が盛んになってきました。

こうした状況の中で、ワグマン、ラグーザなどは、日本の自然と人間の持つ美しさに気づき、更にアメリカ人フェノロサは日本の伝統的美術の持つ価値を高く評価しました。フェノロサは岡倉天心とともに、日本古来の美術の保護や奨励に尽くし、東京美術学校を設立、展覧会を開催したり、世界に日本の美しさを紹介しました。こうしたフェノロサ等の活躍により、次第に日本の伝統美術の持つ優秀性が関係者の間に認識されていったのです。

さて、備前焼は、明治維新により藩の保護は一切失い、置物、茶器は売れず、史上最大の危機を迎えました。大窯は廃止され、陶工達は転業したり、伊部の地を離れて行く者も出ました。

しかし、こうした苦しみの中から、明治6(1873)年に、大饗千代松・木村藤太郎・森喜久助・森栄太郎等によって「明治窯」が発足し、明治10(1877)年には後藤貞三・大饗五郎・行本伝三郎が「陶器改選所」を起こすなど、備前焼の復興を目指す陶工達が現れました。明治20(1887)年には森琳三が「個人窯」を起し、それまでの共同窯による分業多量生産法から、個人経営の窯による一品制作を始め、現在の個人制作への先鞭をつけました。

他方、備前焼の苦境打開のため、従前から作られていた土管の工業化を図り、常滑から職人呼び「土管製造」の会社が設立されました。この伊部土管は好評を得、明治29(1896)年に「備前陶器株式会社」が開業しました。

この時期の作品は、徳利、置物、播鉢、花器等であり、古備前の模作も盛んに作られました。花器の制作が始まったのもこの期です。この他、白備前や青備前、備前焼に釉薬で絵付けをした色備前も作られました。京都から藤江永孝氏を招いて「食塩窯」

を築いたのもこの頃で、本業の備前焼不振の打開のため、八方手を尽した時期です。

窯は、天保窯、明治窯の他に個人窯が築されました。天保、明治窯は昭和初年まで焼成に使われ（天保窯は北窯のみ）、共同窯形式で運営されていました。

大正・昭和時代

欧化の嵐も落ち着き、その行き過ぎの反省が行われてくるとともに日清、日露、第一次世界大戦と相次ぐ戦争を経て、日本の国際的地位も高まってきました。そうした中で国民の間から国粹主義的復古運動が起こり、日本の伝統的文化への関心が強まってきました。

陶芸の面でも、こうした運動は、日本の古陶への強い関心となって表われ、各地で古窯の発掘や展覧会、研究会が開かれました。これに拍車をかけたのが、華族、大名たちの没落によって、名品が世上へ流出したこと、茶華道の流行で、名器の蒐集ブームを生んだことで、この流行は日本の陶磁にとどまらず更に朝鮮、中国にまで鑑賞の目が拡がりました。

こうした鑑賞界の動きは窯業界に強い刺激を与え、多面的な発展をしています。その一つは量産主義であり、また一つは芸術的価値を持つ作品制作を目指す作家集団であり、あと一つが民芸の道です。

備前焼においても、従来の職人から脱し、作家を目指す陶工たちが出てきました。彼らは従来の形式的、定型的土産物生産にあきたらず、花器、茶器、置物に自己の芸技を表現しようと研究を重ねました。

三村陶景は彩色備前から白備前まで幅広く研究を続け「陶器学校」を起して後輩の指導にあたり、各地の窯で修行していた意欲的な陶工が伊部に集まってきました。

陶工たちは各々特色を持ち、各自の研究を深め、

共に助け競い合いました。作品も茶・花器から置物・壺そして食器まで幅広く、従来の備前焼のみでなく、白備前、絵備前から青磁、刷毛目、灰釉と研究は一段と進歩し、優れた作品が多く作られています。さて、こうして息をとりもどすかに見えた備前焼も、

第二次世界大戦へ突入と共に、陶工の徴兵や動員、燃料の不足、又他窯業同様に軍需生産への転換をよぎなくされ、陶製手榴弾や軍用食器の生産を始めました。

しかし、第二次大戦が終結するやいなや、戦後の荒廃した国土の中で、陶芸界はいち早く立ち直りをみせました。政府は日本再建施策の一つとして「産業工芸指導所」を設け、瀬戸、有田、備前をはじめとする各窯業地でデザインや製作技術の指導にあたり、輸出産業として陶芸の発展をはかりました。またすぐれた窯業地や作家を文化財に指定し、伝統工芸の保護振興にも努めました。日展は復活し、各種の陶芸研究グループや愛好家、研究誌が発刊され、展覧会、発表会が催されるようになり、陶芸界は工業としての陶芸に、民芸に、伝統工芸に、また陶芸の範疇に止まらず純粋美術の面にと幅広く深く活躍を始めたのです。

こうした日本の陶芸に注目し激賞したのは、食器として日本陶磁を輸入した世界各地の人達であり、戦後数多く来日した各国の芸術家達でした。彼等により日本の陶芸は世界にその真価を広め、陶芸王国としての基礎を確立していったのです。

かくした陶芸の中で、備前焼は最も日本的であり、陶芸の本質を示すものと激賞され、イサム・ノグチ、バーナード・リーチ、北大路魯山人、川喜多半泥子、荒川豊蔵等著名な芸術家達が伊部を訪れ制作にとり組みました。彼らの斬新な見方や、土と炎という陶芸の本質を生かした制作は、伊部の作家達に備前焼

の価値と、その本質を知らしめ、奮起を促しました。

また、国道2号線、赤穂線の開通は、お茶、お花の流行等は折からの陶芸ブームと相まって、備前焼への需要を増大させ、作家の視野を拡げ、備前焼の発展をより促進しました。

陶工は土を探し求め、従来の水簸土からふるい土・おろし土の製法に進み、明るく土味を生かした焼成法の研究に努力しました。また従来の置物・茶・華道中心の制作活動から更に一步を進め、壁面構成や抽象造形にクラフトにと幅を広げ、現代に生きる備前焼の制作に努力しました。

中でも人間国宝金重陶陽は、若くから備前焼の本質を求めて生涯をかけた作家であり、彼は史的探究の中から桃山期を備前本来の姿とし、その再現をはかりました。この桃山備前の発見こそ現代備前焼の第一歩であり、ここに備前焼第三の黄金期が始まったのです。

世界の備前焼への取り組み

現代の備前焼

伝統工芸美術品における鑑賞や収集の対象となる美術品については、核家族化や住宅事情、生活文化や精神文化の変化により美術品を日常生活の中に取り入れて鑑賞・展示することが少なくなり、保存・管理する場所や時間が無い、また、食器などの日用品は安価な海外製品や汎用品で賄われるなど、伝統工芸美術品への興味関心が薄れ、需要が減少しています。窯業・土石製品製造業の従業者数は、平成21（2009）年には2,385人でしたが、平成31・令和元（2019）年には2,107人と10年間で10%以上減少しており、需要の減による地域産業の低迷が危惧されるとともに生産者の経済的安定が確保できておらず、生産技術の保存・継承が危ぶまれています。

このような状況の打開に向けて、新たな需要を掘り起こすための海外販路の開拓・拡大に向けたアプローチは、観光団体、生産者個人で以前より行われてきたが、伝統工芸美術品生産者は、個人事業主が中心であるため、団体や個人の範囲においての展覧会、個展、販売に限られており、大半が零細個人事業主である伝統工芸美術品生産者からは「製作技術の向上だけで販路拡大まで手が回らない」「海外展開のための煩雑な手続きのノウハウや資金が無い」などの声があり、その継続性や規模、戦略、財源の面で実効性、効率性が低く、商品について業界全体へのフィードバックや啓発、情報共有などの波及効果もない状況です。そのため、中間的に個々の生産者・生産品を取りまとめて事業を推進し、業界全体への情報収集、意見集約等、また、代表して販売計画策定等を行う地域商社など、効率的かつ効果的に推進する組織の構築が必要となっています。

また、現在の生活文化に合わせた商品の開発や伝統工芸美術品の製作技術を他の産業に活用した新たな商品開発や収益確保が必要となっていますが、芸術家としての位置づけもある伝統工芸美術品生産者は、資金面や他の製作技術とのマッチング力、マーケティング力が乏しく、個人での商品開発が困難であるため、個々をまとめあげて他とのマッチングコーディネートやマーケティングに基づく商品の企画提案ができる組織、仕組みの構築が必要です。

これからの取り組み

海外での普及啓発やマーケティングのため、日本文化に関心が高いフランスで開催されるB to BマッチングイベントやB to Cを対象とした販売イベント、富裕層向けのイベントに出展することになっています。また、フランスを中心とした欧州での市場マーケ

ティング調査やフォーラム開催を行い、効率的效果的な海外販路開拓につなげていく。

イベント出展時には、興味を持っていただけのメディアを招聘し、海外メディアを活用した広報を展開し、さらに、欧州の富裕層をターゲットとした芸術価値の高い作品の販売を目指す。

国内需要の掘り起こしについては、インバウンドの誘客促進を図るため、都市部や大阪万博等の機会に合わせたプロモーションを行っていく。

また、WEBを活用した海外への普及啓発や販売促進を図るため、オンラインやVR等のデジタル技術を活用した海外戦略を展開し、国内外での販売を推進する。

販路拡大事業として、国内外の知名度の高いレストランシェフに備前焼を使用してもらえようプロモーションを行っていく。

海外への展開

・令和5(2023)年1月17日にはフランス・ヴァロリス・ゴルフ・ジュアン市、同年1月19日にはイタリア・ファエンツァ市と「友好の書」を締結
ヴァロリス・ゴルフ・ジュアン市とは令和6(2024)年1月16日に姉妹都市協定を締結

・令和5(2023)年7月13・16日には、パリで開かれた「JAPANESE EXPO 2023」に備前焼として出展

・令和6(2024)年4月16・28日にイタリア・ミラノで開かれた世界最大規模のデザインの祭典「ミラノフォーリサローネ※」、フランス・ヴァロリス・ゴルフ・ジュアンに出展したほか、フランス・コルシカ、同・パリ、ドイツ・フレッツヒェン、アメリカ・ニューヨークで巡回展を開催

※国際的なデザイン展覧会「フォーリサローネ」で、「備前焼」と「大館まげわっぱ」の共同展示(ミラノ大学回廊)

中世古窯復元「土窯」プロジェクト

1989年から、備前焼作家の平川忠氏は備前焼中世古窯(約700年前の窯)の忠実な復元と焼成を目的として着手し、2002年に1号土窯、2010年には、備前市教育委員会と共同で2号土窯を築窯・焼成し、実証実験を重ね、土窯の持つ特性は現代の窯にも劣らない優れたものであることを実証してきました。

中世古窯の窯壁の構成素材は土壁で、後の、日干しレンガ(土を型枠の中で突き固めたブロック)、耐火レンガのように突き固められることなく、自然の土の柔らかさそのままに築かれています。このことが独特の熱を生み、現代のレンガ窯、ガス窯、電気窯等のどの窯よりも、土を焼くということに適しており、備前焼本来の焼成の源泉になっていることも実証できました。また焼成に使用する燃料は多様な樹種が用いられていたことも解明できました。

〔引用元・参考文献〕

『和気郡史 資料編 下巻』

1983 和気郡史刊行会
『やきもの備前』柳生尚志 1990
(山陽新聞サンブックス) 山陽新聞社

『陶説』(652号)「備前焼窯跡の調査(二)」

石井啓 2007 日本陶磁協会 pp.86・97

『備前焼』

間壁忠彦 1991 ニュー・サイエンス社
『土窯プロジェクトの趣旨』 赤井夕希子HP